

	デュルケーム / デュルケーム学派研究会 <i>Japanese Association for Durkheimian Studies</i>	
	ニューズレター 第2号〔2001年12月25日発行〕	
編集事務局 奈良女子大学文学部 0742-20-3263, 3264	郵便振替口座番号：00980-4-20999 (口座名称)デュルケーム研究会	
編集 大野道邦	中島道男	江頭大蔵
<mitikuni@mua.biglobe.ne.jp><mnakajima@cc.nara-wu.ac.jp><egasira@law.hiroshima-u.ac.jp>		

デュルケーム / デュルケーム学派研究会の趣旨

世紀転換期のグローバルなレベルにおける社会的、文化的な変化の中であって、最近、国際的にも国内的にも、デュルケームやデュルケーム学派の業績の再評価の機運が高まってきている。わが国においても、若い世代を中心としてデュルケーム / デュルケーム学派に関心を抱く研究者が増えつつある。

このような状況を考慮に入れつつ、前世紀転換期の古典であるデュルケーム社会学、および、その発展型としてのデュルケーム学派について調査・研究することによって、現世紀転換期の社会・文化・人間の構造や動態を分析・説明・解釈するための基礎的・原理的なパースペクティヴを明らかにしたい。このために、相互啓発的な研究会を定期的に開催する。

第2回研究例会 (2001年4月21日、富山大学経済学部)

報告1 景井 充 氏 (立命館大学)

デュルケーム道徳社会学を批判的に再構成するための基本的論点
コメンテーター：嶋守さやか 氏 (金城学院大学)

報告2 太田健児 氏 (尚絅女学院短期大学)

モラル・エンジニアリングとしてのデュルケーム道徳論とその今日性
- 第3共和制期のシヴィリズム問題・時代診断・モラルサイエンス -
コメンテーター：巻口勇一郎 氏 (立命館大学)

第3回研究例会 (2001年9月29日、高野山 無量光院：高野山大学)

報告1 手戸聖伸 氏 (東京大学)

フランスにおける宗教概念の変遷とデュルケーム宗教社会学の位置
コメンテーター：中島道男 氏 (奈良女子大学)

報告2 岡崎宏樹 氏 (京都学園大学)

力としての聖 デュルケーム 集合力概念の再検討
コメンテーター：大野道邦 氏 (奈良女子大学)

第2回研究例会報告要旨

〔報告1〕 景井 充 (立命館大学)

デュルケーム道徳社会学を批判的に再構成するための基本的論点

デュルケーム社会学理論における道徳論は、その理論的意義の大きさについての一応の共

通了解にもかかわらず、なお解明の不十分な領域であり続けている。デュルケム道徳論が決定的に重要なのは、デュルケム社会学理論をその内側から批判的に乗り越えてゆく可能性と現代的な脱皮の方向性を示唆しているからである。そうした観点から、デュルケム道徳論を批判的に再構成し、その展開可能性を探るために検討すべき基本的論点は、以下の3点であると思われる。

1. 「社会形態学的事実」の批判的分析。「社会形態学的事実」の内容がそれ自体錯綜しているのは、最も重要な概念である「動的密度」の理論的重要性について彼自身が十分自覚的でないためである。しかし、見方によっては『規準』全体がこの概念の理論的重要性の論証作業であり、“外から内へ”という彼の研究態度の一つの到達点を示してもいる。つまり、社会的世界における重力の法則として研究対象から外した『分業論』から、第5章で「精神的（道徳的）凝集」という一歩踏み込んだ定義を与えた『規準』を経て、集合的沸騰現象の核心として捉えた『原初形態』へと至るわけである。現時点では、「動的密度によって念頭におかれているのは、実質的に諸個人の間での心的相互作用である」（『デュルケムの社会理論』中久郎、88頁）という指摘が最高到達点であると思われる。この「相互作用」に何を看てどう評価するか、どこに位置づけるか、さらに何を盛り込むかにより、デュルケム社会学理論を批判的に乗り越える新たな理論構成の起点が獲得できると思われる。

2. デュルケムの意識論の転換。上に指摘した「動的密度」の理論的重要性は、「社会は道徳的実在である」というデュルケムのテーゼを、客観的な社会的観察者の視点からではなく、現にその社会を生きる行為当事者の視点から了解しようとする際に、決定的に重要になる。デュルケムの意識論としては人間性の二元性論が周知であるが、上の関心にとってそれは致命的欠陥を抱えている。「個人意識」は、身体的な感覚レベルの孤立的な意識として措定されているために、「集合意識」の発生論的源泉である「動的密度」＝「結合」を現象させることができないという理論的欠陥である。これに対し、『道徳教育』中の altruisme / égoïsme 論は、まったく異なる次元の二元性論となっている。彼は、人間の意識を生来的に表象の集積と捉え、外的表象と内的表象への表象群の流動的分節化を捉えている。その際重要なのは、彼は意識を分節化する主体について「《私》と語る主体」を一応想定しているが、あくまでも「我々」という共同態体験の中でのみ生じる表象の分節化こそが重要だと強調している点である。であればこそ、altruisme 的表象の頂点をなす「集合表象」は集合的産物＝社会的物事なのである。ここに、デュルケム道徳社会学ひいてはデュルケム社会学理論全体の原像がある。

3. デュルケム道徳論と現代。デュルケムは、彼の言う「組織的社会」については本格的な解析を残していない。『分業論』の課題は、分業そのものではなく分業の成立条件を突き止めることである。そして、彼が突き止めたその条件とは、消滅してゆくはずの集合意識の存続であった。すなわち、社会的分業が成立するためには社会的分化を「社会的分業」に転化させる要因が必要であるが、それは競争をもはらむ社会的分化それ自体の中にはなく、それゆえ社会的分化の“外部”にある何らかの力でなければならない。かつての集合意識の規範的拘束力が呼び戻される。ここから、集合意識の抽象化 - 「局域的集合意識」から「一般的集合意識」へ - という主張が出てくる。分業が成立する、つまり「組織的社会」が成立するということは、その内部に二重構造 - 機能的分化とその進展 / 集合意識の一層の抽象化 - が成立するということなのだ。

ところで、機能的分化の進展とその範囲の拡大にあわせてその全面に規範的拘束力を及ぼし得るためには、集合意識はそれに比例してその影響力を増大させなければならない。しかし、その道徳的影響力の源泉であった直接的な集合的沸騰ないし共同態現象は、社会的な人口規模（「社会の容積」）の拡大によって今や不可能である。端的に言えば、元々の狭い意味での「動的密度」はもはや現象し得ないのだ。では、「一般的集合意識」が存在し得るとして、その道徳的影響力の源泉はいずこに求められるべきか。デュルケム自身による道徳教育の提唱は、暗黙裡に「動的密度」の消滅を認めるものである。

社会全体を覆うような規範的要素は存在し得るか、存在するとすればその拘束力の源泉はいずこに求めることができるか。デュルケムの葛藤と矛盾の焦点はここにある。我々の

態度決定が求められる地点である。

〔報告2〕 太田健児（尚絅女学院短期大学）

モラル・エンジニアリングとしてのデュルケム道徳論とその今日性 - 第3共和制期のシヴィスム問題・時代診断・モラルサイエンス -

「2つのフランス」は19世紀、その道徳的ヘゲモニーをめぐる熾烈な政治闘争を展開してきたが、第3共和制期の「ライシテ」(laïcité)は、その妥協の産物であり、「シヴィスム」(civisme)問題として結晶化された。1881年、1882年、1886年の3つの教育法制定により「教育のライシテ」が、1901年の結社法、1905年政教分離法によって国家のライシテが制度化されたが、その内実は、教育法からの「神に対する義務」(devoirs envers Dieu)の文言削除と、宗教教育に代替する教科「道徳・公民教育」(instruction morale et civique)の設置問題であった。共和主義派、反教権主義派は、国粹主義派、教権主義派に対し、「道徳・公民教育」が党派的な政治教育・インドクトリネーションではない事を示すためその理論化が急務とされた。つまりシヴィスム問題とは、宗教に依拠しない新たなモラルとしての「市民性」(=「公民性」)(citoyenneté)の構築と、それに基づく「道徳・公民教育」の確立であった。今日風に言えば公共性の再構築にほぼ該当するものといえる。

しかし、「シヴィスム」に関するデュルケムの時代診断は厳しい。『道徳教育論』(1902-03)「道徳的事実の決定」(1906)『宗教生活の原初形態』(1912)「未来の宗教」(1914)等では、いずれもライシテ以降を「既存の観念や習慣の動揺」、「伝統的道徳の動揺」、「宗教の代役が未完成」、「かつての義務の支配力喪失と新しい義務の曖昧さ」、「一つの危機の時代」、「過渡期且つ道徳的陳腐さの段階」、「道徳の冬の時代」と診断されている。

では、デュルケムの道徳研究はシヴィスム問題をどう受け止め、またその取り組みに今日的意義があるとしたらどの点にあるのか？

その特徴の一つとして「倫理」と「倫理現象」との“当座の区別”が指摘され得る。これらは所謂ラングとパロールとの区別及び相関関係に比せられる。但し、「倫理」「倫理現象」は一つの倫理問題の二側面であって、分離して実体的に存在しておらず、またデュルケム自身の用語でもない。しかし「倫理」は現実において、道徳に適った行動・逸脱した行動という外面化された「倫理現象」としてのみ観察可能であり、ここに経験科学が成立するが、この相が「習俗の科学」であった。しかし、Sein から Sollen が導出できないという「相対主義」問題がそこで生じるが、「倫理」「倫理現象」の区別は、むしろこの問題の解決を目指した一種の「公理主義」(axiomatism)ともいえる。公理体系とは、ある明確に限定された言語「=概念=原則」のみを用いて公理を立て、また、明確な変形規則のみ用いて、公理から定理を演繹する理論体系[=インファレンス・ルール=推論規則=公理から定理を導く際に許容される変形規則]をいう。このような公理主義が適用されれば、「倫理」に対して末端部分の「倫理現象」を「つき合わせ」て齟齬が生じた場合、倫理現象の側から、逆にインファレンス・ルール部分の改正、公理自体の改正が可能になり、「倫理」が変わる。本稿は、このような「倫理」と「倫理現象」との絶えざる「つき合わせ」による「倫理」の微調整を、エンジニアリング的な作業に譬えて「モラル・エンジニアリング」(=「倫理工学」)と暫定的に命名している。「エンジニアリング」とは決して小手先の技術ではなく、アノミー状況克服あるいはポスト・ライシテとしての公共性構築のための微調整であり、いずれは「倫理」を根本から変える設計技術である。デュルケム社会学の下地にはこの「倫理工学」があり、この視点から「社会」自体に言及した点では、ソーシャル・エンジニアリングとも言え、未完であったが、当時の最先端のモラル・サイエンスの試みであり、この点に今日的意義があると考えられる。

参考文献(兼註)

ジャン・ボベロ(著)石堂常世(監訳)太田健児(訳)「フランスにおける世俗的道徳の確立とその今日的意義」『日仏教育学会年報第24号』, 1996年, 30-33頁。

Alain Mounie, *Les débuts de l'instruction civique en France*, PUF, 1992, pp.57-78.

Yves Déloye, *École et citoyenneté*, ScPo, 1992, pp.32-35.

[*尚、デュルケムからの引用に関しては当紙面では一つ一つ註で表記していません。]

第3回研究例会報告要旨

〔報告1〕 手戸聖伸（東京大学）

フランスにおける宗教概念の変遷とデュルケム宗教社会学の位置

当発表では、第三共和政期の主要なテーマであるライクな道徳と宗教との関連のなかでデュルケムの位置を探った。まず第三共和政期の「宗教」をとらえるために、「宗教」の概念史を追いかけこの時期に「宗教」という概念がどのように受け止められるようになっていくのか、その展開を「道徳」との関係で論じた。その上でデュルケムの「宗教」「道徳」概念はそれとはどのような距離にあるのか、彼じしんも新たな宗教概念形成に寄与している側面があるかどうかについて考察した。

W・C・スミスは『宗教の意味と目的』のなかで西欧における「宗教」の用法の変遷をまとめている。その議論を整理すると、中世以来の用法で近代に入ると弱まる単数形で用いられる「実践としての宗教」、外から観察され複数形でも語られうる「システムとしての宗教」、個人的な信仰や内面の敬虔さを指し示す「個人の内面の宗教」、複数の諸宗教を1つの「宗教」のもとに時系列的に陳列する「歴史的に発展し学問の対象となる宗教」の4つが19世紀後半までに出揃っていたということになる。フランスでもこれら4つの用法を確認することはさほど難しくないだろう。ただ以上の4つの用法から独立させて「社会の統合力としての宗教」という5番目の用法も設けたい。革命後のフランス社会は、政体もめまぐるしく変化し、なかなか混乱を収拾することができなかった。そのとき社会をまとめあげる紐帯として「宗教」に期待がもたれていたのである。

第三共和政を迎えるころには以上のような用法が出揃っていたとして、どのような傾向が次第に強まってくるか。それは「宗教」をとらえるにあたって、心理的な方向と社会的な方向とに二極化してくるということである。実際制度上は、宗教は私的な領域に追いやられていくのだが、公的な領域が宗教と無縁になるとは言い切れない。その「公」の領域の宗教性として指摘したいのがライクな道徳である。この宗教性は、宗教的道徳からの断絶という表明にもかかわらず随所にうかがえる連続性と、それをもとに国民国家形成がはかられたという点でルソーやベラーの言う「市民宗教」に相当するのではという、2つの観点から指摘できる。このライクな道徳と宗教との関係はいかなるものだったのか。第三共和政の支配的言説を形成するのに大きな影響を持つ位置にいたJ・フェリーの発言から見定めれば、「道徳」はひとつで公的なもの、「宗教」は複数あり私的なもの、と整理ができる。

それではデュルケムは「道徳」や「宗教」をどうとらえたのか。それは支配的言説といかなる距離を保っていたのか。デュルケムは「宗教」を、ますます私事化されてゆくけれども社会統合を果たし続けもするいわば二重化したものにとらえていた。重要なのは、過渡期にあってふさわしく変化することだった。では「道徳」と「宗教」の関係はどうとらえられていたか。基本的に彼は、「道徳」は「宗教」と密接な関係があるが、それに依るのではないと考えている。道徳的実在は社会に求められ、それで道徳は矮小化も変質もせず、かえって経験的実在に立ち返ることになる。このことは宗教的実在についても同様である。そこで両者がパラレルに論じられることにもなる。道徳は社会が成員を規制する感覚だけでなく、その義務の遂行が喜びを成員に与えるということもデュルケムは強調している。この点は宗教論についても同様である。神は人を畏怖させ震え上がらせるような恐ろしい力でもありながら、人を頼みとし友好的で親しみに満ちた力でもある。

このように「道徳」が規制力でもあり歓喜でもあること、「宗教」が畏怖させるもので

もあり魅力でもあることは、ベルクソンの議論にもつながっていくだろう。道徳と宗教の積極的・消極的な両側面についてはF・ビュイッソンも強調している。「道徳」と「宗教」が分離される時代にあって両者の関係をどう考えるかは、論者によって微妙な差異がありながら、類似してもいる。デュルケムにおいては、「現代」の「宗教」は二重化していて、私的な領域では衰退途上の「宗教」が、公的な領域では永遠にその特徴をとどめた「宗教」がある。彼の「宗教」概念と「道徳」概念は、第三共和政の主流のみに比べてみると、社会全体を覆う「宗教」を考え、社会によって変化する「道徳」を想定している点で、確かに微妙な路線の違いがあるが、類似も伺えるのなら、それは時代の共通の課題であった「ライクな道徳」という形成途上のものの内実をどれだけ豊かにできるかを各々が模索したからだろう。

〔報告2〕 岡崎宏樹（京都学園大学）

力としての聖 デュルケム 集合力概念の再検討

社会という意味世界は、差異化された諸要素によって、閉じた内部システムとして構成されている。このことは、「世界内の諸要素がすべてではない」という否定の形式によってのみ言及可能であり、世界内には現出することのない非意味の次元が同時に存立しているということでもある。非意味の次元は、意味世界の自己境界の彼岸を示すものであるから、これを空間的に表象するならば、世界の 外 と表記できる。

聖が日常世界の彼岸における現象であるならば、個人と社会の二元論的世界の「内」において聖を把握したデュルケム理論が整合的であるかどうかをいま一度問い直す必要があるのではないか。この問題意識から本報告はデュルケムの集合力概念の再検討を試みる。

1. 超越的な力と内奥的な力

デュルケムによれば、宗教力（集合力）は、「集合意識が個人意識に働きかける様式を示す」[FE, 319 = 上 401]のものであり、個人の意識を方向づけ強制する「外的な力」[FE, 312=上 393]である。ところが、デュルケムはときに集合力を情動的エネルギーの横溢や爆発として記述し、それを集合意識の拘束を逃れる力ともみなしている [SP, 115=125] [FE, 548 = 下 267]。拘束と横溢という矛盾した規定がなされているのである。

2. 非人称の力の三次元

そこで、関係概念としての力を以下のように整理すれば、より整合的なものとなるだろう。

聖の作用は 非人称の力 として感受される。非人称の力 はその水準の差異によって「超越的な力」と「内奥的な力」に区別される。集合力は、集合意識が超越的な水準から個人意識に働きかける作用であるから、社会（集合生活）に由来する「超越的な力」と表示できる。これはさらに「想像的合一の力」と「観念構造の力」に分類することができる。

一方、ひとが消尽するときに感受するのは、世界の 外 に由来する「内奥的な力」であり、エネルギー論的に言えば、「消尽する力」である。これは集合力 = 超越的な力とは水準の異なる作用である。（なお、力の三次元は、ラカン精神分析における想像界・象徴界・現実界の区別にゆるやかに対応している。）

2 - 1. 想像的合一の力

想像的合一の力は、集団の 合一 communion が想像的に観念されたときに喚起される集合力を意味する。集合状況において行為の同調が高まると、全員の身体があたかも一つの身体であるかのような様態が現出する。「多数の個人意識の一つの共同意識への融合、

合一」[1914, 328 = 260]とは、個体の身体感覚が集団の身体という間身体的連鎖へと拡大することと解釈できる。この拡大された身体の作用が想像的合一の力である。

2 - 2 . 観念構造の力

デュルケームによれば、社会が存続するためには、十分な道徳的同調が必要であるだけでなく、「最小限の論理的同調」が必要である[FE, 25 = 上 43-44]。私たちの内面には、基本的概念にもとづいて構成された観念構造が存在するので、そこから逸脱するときには「抵抗」が感じられる。この抵抗は、社会が最小限の同調を確保するために発動するものであるから、一種の集合力とみなしうる。論理的規範への同調を強制する集合力は「観念構造の力」として位置づけられる。

2 - 3 . 消尽する力

集合意識の拘束を逃れ消尽する力は、「内奥的な力」として位置づけられる。消尽とは、エネルギーを社会秩序の持続や個体の自己保存といった有用な目的に向けることなく、燃焼のために燃焼させることである(Bataille 1976)。消尽においては、主客を分割する認識作用が無化されるので、主客が相互浸透し(「溶解体験」、内奥的なものと感受される。このとき主体は非・知に至り、集合意識と個人意識の外 の次元にさらされる。

結論

二元論に立脚した体系は、必然的に、外 の水準における非人称の力(「内奥的な力」)を社会に由来する力(「超越的な力」)へと還元することになる。精確な分析のためには、社会理論を外 をパースペクティブに収めた体系へと展開しなければならないだろう。

引用文献

Durkheim, É.

FE *Les formes élémentaires de la vie religieuse*, 1912 (2^e éd., P.U.F., 1990) = 古野清人訳『宗教生活の原初形態』(上・下)岩波書店、1975。

SP *Sociologie et philosophie*, 1924 (nouv. éd., P.U.F., 1996) = 佐々木交賢『社会学と哲学』恒星社厚生閣、1985。

1914 “Le dualisme de la nature humaine et ses conditions sociales”, *La science sociale et l' action*, P.U.F., 1970 = 佐々木交賢・中嶋明勲訳「人間性の二元性とその社会的諸条件」『社会科学と行動』恒星社厚生閣、1988。

Bataille, G., 1976 *La souveraineté, O.C.*, t. , Gallimard = 1990 湯浅博雄・中地義和・酒井健訳『至高性』、人文書院。

okazaki@kyotogakuen.ac.jp

〔書評1〕 北垣 徹(京都大学)

Mucchielli, Laurent, 1998, *La découverte du social : naissance de la sociologie en France (1870-1914)*, Paris, Editions La Découverte.

著者のロラン・ミュキエリは本書以前に、フランスにおける犯罪学の歴史にかんする論集¹⁾を、また『社会学的方法の規準』百周年に際しては、社会学の方法論をめぐる論集²⁾を編んでおり、すでにその名は学会で知られつつあった。しかし彼の名を一躍広めることになったのが、何よりもこの『社会的なものの発見』である。彼はさらに本書出版の同年にはダニエル・ベックモンとの共著³⁾のなかで、フランスにおけるスペンサーの影響についても論じ、他方で1999年からは『人文科学史評論』⁴⁾を創刊、その編集の任に携わっている。社会学史を越え、さらに幅広い人文諸科学の歴史という視野のなかで刺激的な視

点を提示しつつ、現在のフランスにおいてこの分野でもっとも精力的に活躍する研究者の一人といえよう。

本書の狙いは、社会学が制度的に確立する 19 世紀末から 20 世紀初頭に焦点を当てつつ、社会的なものにかんする知の認識論的「パラダイム」この語は著者も冒頭で触れているように、まさにクーンの意味においてをあらためて問い直すことにある。もちろん同種の試みはすでにさまざまな研究者の手によってなされており、例えば本書でもひとつの説明軸として重視されているデュルケーム/タルド/ウォルムスという競合関係は、すでに 20 年近くも前にテリー・クラークが示したものだ⁵⁾。またこのなかからライバルを制してデュルケームが支配的な位置を占めるようになった要因として、「エキップ」としてのデュルケーム学派の存在や、その中核にある『社会学年報』という媒体を重視するのは、もはや定説とよんでもいいであろう⁶⁾。しかしながら 500 ページを優に超えるミュキエリの本書は、まずその視野の広さ、豊富な情報量によって既存の研究を圧倒している。そしてもちろん、すぐれているのは量的な側面においてだけではない。本書は明快な論述を重ねるなかで、これまでにはないいくつかの斬新な視点を提示している。評者はとりわけ、以下の二点において本書を高く評価する。

第一には、ミュキエリが社会学的な知の成立を「生物学的なもの」からの断絶の試みとして、はっきりと位置づけている点である。本書の第一部は、前史として第二帝政期から考察を始め、プロカの人種学からラカサーニュの犯罪学、ル・ボンやヴァシエ・ド・ラージュラの人種学・優生学までを取り上げる。ダーウィンやスペンサー、ラマルクらの進化論を背景とし、これらの領域で産み出される社会や人間にかんする生物学的な知は、著者によって「自然主義的モデル」とよばれている。著者によれば、こうした社会や人間についての自然主義からの断絶こそが社会学的な知の成立をもたらすのだ。このことは決して自明のことではない。例えば社会学が実証科学として成立するためには、むしろ生物学との連続性が強調されたという説もあるからである。あるいはより具体的には、デュルケームをクロード・ベルナルとの平行性において論じたり、アルベルト・シェフレについての初期の書評を取り上げて、デュルケームを社会有機体論の文脈で捉える議論も存在している。しかしミュキエリの視点からすれば、こうした問題設定はむしろミスリーディングだ。本能や遺伝・人種などの生物学的要因によって社会現象を説明しようとする還元主義的な自然主義的モデルから切れて、「社会的なものによって社会的なものを説明する」というパラダイムが成立することが、むしろ社会学の誕生を画するのである。

こうしたことは現在の社会学的認識を自明の風景として受け取ってしまうなら、なかなか意識されることはない。実際今日のデュルケームの読者は、「遺伝」と題された『社会分業論』第 2 篇第 4 章、また「遺伝、人種」と題された『自殺論』第 1 篇第 2 章にあまり注意を払うことはないのではないか？これらの章でデュルケームは、遺伝や人種などの生物学的要因は分業や自殺の原因とはなり得ないか、あるいは二次的な原因にすぎないことを懸命に論証しようとしている。これは逆にいえば、こうした要因によって社会現象を説明しようとするパラダイムが、社会学の創始者によって標的にされるほど広く普及していたことを意味するといえる。あるいは、われわれはデュルケーム/タルドの対抗関係を意識しすぎるあまりに、両者が共有している点、すなわち二人とも社会ダーウィニズム的な見方には強く異議を唱えていた点を、不当に無視してはいないか？『模倣の法則』の著者にとっても、個人間で欲望や感情が拡がっていくという社会心理学的観点を強調することは、やはり生物学的なものからの切断なのである。

もちろん本書はデュルケーム/タルドの差異を見逃すものでもない。1880 年代から世紀の変わり目に向けてこのように成立していく社会学的知のなかで、タルドやウォルムスらの同様の試みを抑えつつ、いかにしてデュルケーム学派が「フランス社会学派」になるのかという説明も続く。この点にかんしては、ミュキエリはこれまでの研究成果を踏まえた多面的な説明を提示している。つまりまず認識論的な水準においては、デュルケームらが「生物学的なもの」から、さらには「心理学的なもの」からも、もっとも深く断絶したということ⁷⁾、またそうした方法を『規準』のようなかたちでマニフェストできたことがある。また制度的水準では、すでに触れたように学派としての知の形成、その中核を担っ

た『年報』の存在がある。そしてさらに政治的水準では、ブーランジェ事件からドレフュス事件のなかで揺れるフランス社会のなかで、近代的個人主義を擁護しながらも道徳の問題を思考し、左右両方から距離をとりつつ共和派イデオロギーを構築できたこと、またドレフュス擁護に際しては、知識人として集合行動の在り方を提示できたことなどもある。こうした点はすでに先行研究のなかで多かれ少なかれ指摘されてきた点ではあるが、ミュキエリはそれらを明快かつ総合的な視点から再構成している。

本書において評価すべき第二の点は、人文諸科学の歴史を考えることの意義を著者がきわめて説得的に例示している点にある。これまでの業績でも分かるように、ミュキエリはいわゆる科学史的な手法を人文諸科学全般にまで広げようとする。彼によれば、こうした人文科学史はディレタントの専有物ではけっしてない。むしろ人文科学の諸学科の歴史を辿ることは、大きな教育的な効果をもたらすものだともいう。つまりますます専門化し細分化しつつある今日の学問状況のなかで、歴史はその未分化の状態から出発することで共通の思考の場を提供しようというのだ。また学生数の増加により、より簡潔かつ効率的に当該学問の導入を図らねばならない場合にも、歴史は格好の材料となることも指摘されている。

ただしそれはたんなる「古典への回帰」であってはならないということも、ミュキエリは併せて強調する。つまり何よりも重要なのは「批判的読解」であり、同時代の知的・制度的・政治的な文脈を踏まえつつ問題構成を探ることであって、ある聖典への絶対的帰依であってはならない。むしろ必要とされるのは、共時的・横断的な視野をもつことであろう。本書の第二部では、社会学の成立によってもたらされた認識論的転換が、いかに他の諸学問分野に影響をもたらしたのかが論じられている。ここで詳しく紹介する余裕はないが、それは生物学から心理学、犯罪学、地理学、歴史学、民族学、言語学など、まさに多岐にわたる領域で行われるのだ。「批判的読解」とは何よりもこうした広大な視野を必要とする。ミュキエリによれば人文科学史はアングロ・サクソンの国で伝統的に強く、フランスはそこからおよそ 20 年遅れているという。しかし彼の精力的な活動からすれば、その遅れは早急に取り戻されるのかもしれない。そして、わが国においても同様の試みを行うことは、けっして無益ではないだろう。

評者は個人的には、このようにあらためて人文科学史の視点をもち直すことで、例えば 1970 年代以降に隆盛を見せた「社会生物学」と社会学との関係を、あらためて考え直すことができるのではないかと考えている。今日の社会学は驚くべきほど社会生物学的な発想から遠い。しかしそれは、社会学的な認識がもともと生物学的なものからの断絶によって成立したことに思い至るなら、何ら驚くべきことではなくなる。しかしそのことは同時に、19 世紀末において社会学は社会ダーウィニズムを乗り越えることによってというよりも、むしろそこから意図的に身を引くことによってみずから確立したということの意味する。その点では社会学とは、社会生物学のような新たな社会ダーウィニズムにたいしては、理論的には依然無力なのだ。分子生物学や遺伝子工学のような分野の発達により、生命倫理の問題はより切迫したかたちでわれわれの前にある。そのときに社会学的な知は、その出自からして生物学的な還元論からは身を引こうとする、そのことを十分考慮に入れておくべきだろう。「社会的なものを社会的なもので説明する」このことによって社会学は自律した学問としての成立の途を拓いた。しかしまさにそのことによって、ある盲点をもたらされることも否定できない。人文科学史を考えることの最大の意義は、こうした批判精神を養うことであろう。

- 1) Mucchielli, Laurent(sous la direction de), 1994, *Histoire de la criminologie française*, Paris, L' Harmattan.
- 2) Borlandi, Massimo, Mucchielli, Laurent(sous la direction de), 1995, *La sociologie et sa méthode : les Règles de Durkheim un siècle après*, Paris, L' Harmattan.
- 3) Becquemont, Daniel, Mucchielli, Laurent, 1998, *Le cas Spencer : religion, science et politique*, Paris, Presses Universitaires de France.

- 4) *Revue d'Histoire des Sciences Humaines*, Villeneuve d'Ascq, Presses Universitaires du Septentrion. 現在までのところ第5号まで刊行されており、創刊号の特集は「アルヴァックスと当時の人文諸科学」、第3号は「タルドと世紀転換期の犯罪学」。
- 5) Clark, Terry, 1973, *Prophets and patrons: the French university and the emergence of the social sciences*, Cambridge(USA), Harvard University Press.
- 6) この点にかんしてはベナールのものをはじめとする論文を含んだ *Revue française de sociologie* « *Les durkheimiens* », vol.XX, n°1, janvier-mars 1979 などを参照。
- 7) ミュキエリは触れてないものの、この点についてはすでに Georges, Guille-Escuret, 1994, *Le décalage humain : le fait social dans l'évolution*, Paris, Kimé がより鮮明な図式で示している。

〔書評2〕 江頭大蔵（広島大学）

Leroux, Robert, 1998, *Histoire et sociologie en France: De l'histoire-science à la sociologie durkheimienne*, Paris, Presses Universitaires de France.

デュルケームやデュルケーム学派の社会学者たちが社会現象の歴史的研究に深い関心を寄せていたことは、そのアナル派歴史学への影響とともにしばしば指摘されてきた。1929年に『社会経済史年報』*Annales d'histoire économique et sociale*（以下『アナル』と記す）を創刊したアナル派の創始者、リュシアン・フェーブルとマルク・ブロックが、デュルケームの社会学と『社会学年報』のプログラムに影響を受けたことは、よく知られたエピソードである。また、デュルケーム学派の中核メンバーで両者のストラスブール大学での同僚にあたるアルバックスは、この新しい歴史研究誌の編集委員に名を連ねていた。

アンリ・ベールの『歴史総合雑誌』*Revue de synthèse historique* とともにデュルケーム学派がアナル派歴史学の形成に決定的な影響をおよぼしたのは、19世紀末から20世紀初頭のフランスにおいて、歴史学者と社会学者の間で戦わされた方法論的論争のインパクトによるところが大きい。デュルケームは『社会学年報』創刊号の序文(1898)で歴史学と社会学の協力関係促進をうたえつつも、従来の歴史学の研究方法に対しては既に厳しい批判を展開していた。そのデュルケームの立場に共鳴するシミアンは、「歴史的方法と社会科学」(1903)と題する論文において、従来の歴史学で単に時間的に先行する偶発的原因を示すことを「説明」としてきたことを批判し、諸事実間の法則的結びつきを示すことこそが因果的説明であるとして、歴史学界の大家セニョーボスの著作を徹底的に糾弾する。これが発端となって、その後歴史学者と社会学者との間で大きな論争が巻き起こった。

本書は、この「あまりにも有名ではあるが、いまだに系統的研究が現れていない」論争を、歴史学と社会学との対話の起源にまでさかのぼり、またその後の展開をアナル派形成の前後まであとづけることで、科学としての正当性を手中にしようと方法論的問題を検討していた歴史学と当時飛躍しつつあった社会学の相互作用、および両者の発展をよりよく理解しようとするものである。

本書は3部構成をとる。第1部「科学的歴史学のプラン」では、コントラの歴史実証主義からはじまり、歴史学を科学たらしめようとする歴史-科学 *histoire-science* の様々な分枝が検討される。著者によると、時には対立し、時には相補う諸観点から、2つの正反対の方法論的傾向が現れた。ひとつは、歴史は個別的出来事の作用に過ぎないとするもの(セニョーボスら)で、もうひとつは、人類の歴史の進歩は抵抗しがたい必然性によって支配されているとするもの(フステル・ド・クーランジュ、ルイ・ブルデューら)である。歴史-科学はこの2つの観点の間を揺れ動いた。第2部「アンリ・ベールと歴史的総合」では、歴史学を改革するためのベールの諸活動が2章にわたって検討される。歴史学の過度の専門・細分化に対して危機感をもつベールが、社会学の勃興に刺激を受け、歴史学と人間諸科学との対話をめざして『歴史総合雑誌』を刊行したことは周知のことであろう。この雑誌には、後に『社会学的方法の規準』第二版序文へと転用されるデュルケームの「社

会学における客観的方法について」(1901)や、歴史学者と社会学者の間の論争の嚆矢となったシミアンの前述の論文が掲載され、歴史学と社会諸科学の相互作用が促進された。ベールの歴史的総合により、歴史のための歴史学、事件史中心の歴史学は後退し、歴史学の対象は個別的なものから一般的なものへ、事件から制度へと次第に移行していった。

第3部「デュルケーム学派と歴史学」では、デュルケーム、ブーグレ、シミアン、アルバックスの4人にそれぞれひとつの章が割り当てられ、歴史学に対する各人の立場と歴史的方法を応用した研究例が検討される。これらの中ではシミアンをあつかった章が分量的にも最も長く、歴史学者との方法論的論争および賃金や経済変動の長期波動にかんする歴史的分析が、その後の社会史・経済史の発展に決定的な影響をおよぼしたということが確認される。本書評ではデュルケミアンをあつかったこの第3部で得られまた確認した知見をベースに、期待はしていたが必ずしも本書で十分に展開されているわけではない2つの点について私見を述べておきたい。

まず第1は、『社会学年報』に参加したデュルケミアンがほぼ全員一致して、実証的社会学の彫琢には歴史学の援用が必要であることを表明しているとしても、歴史的方法に対するスタンスには無視しえない差異があるという点である。デュルケームは歴史に対して二重の役割を求めていたように思える。ひとつは、歴史的領域の空間的および時間的広がりの中に、間接的実験としての共変法の素材を見つけることであり、もうひとつは、社会現象を歴史的過去からの発生・生成の脈絡の中に位置づけて社会学的分析を実行することである。シミアンは前者の観点を徹底させ、研究者が間接的にしか知りえない知識について歴史学的考証をとおして観察データを求め、その観察データの統計学的な制御・比較・検討により社会諸現象間の法則的因果関係を求める「実験的方法」を展開した。しかしデュルケームが歴史に対して求めたもうひとつの観点到に含まれる「起源の探求」については、シミアンは徐々に否定的となり、少なくとも彼が研究対象とした経済現象の分野では、複雑な現象を説明するためにその萌芽の状態にまで遡る必要を認めなくなる。また、アルバックスは『アナル』創刊時に編集委員会に参加していたが、彼にとって歴史学は隣接諸科学のひとつにすぎず、デュルケーム、ブーグレ、シミアンほどには重視してはいなかった。たしかに、彼の研究で歴史学とのかかわりが深いものとして集合的記憶論がある。しかし、集合的記憶は歴史学があつかう歴史とは対照的なものとして把握され、また集合的記憶がアナル派の「生きている歴史」に対応するとしても、それを探究するために伝統的歴史学のあり方に対して改革が求められることはない。アルバックスにとって、歴史学と社会学は相互に浸透しあうものではなく、その対立は根本的なものであった。ひとりデュルケーム自身についてさえ、その歴史的方法の正確な位置づけと理解は十分に追究されていないと思われる。デュルケミアン全体を見渡すとすると、歴史学や歴史的方法に対するスタンスについて、どのようなマトリックスが描けるのであろうか。

第2は、歴史学と社会学とがぶつかり合ったこの論争の、社会学に対する影響と帰結についてである。著者は結論部を、一連の論争的相互作用が歴史学の変貌を帰結したとしてしめくくっている。もはや出来事の歴史は省みられなくなった。『アナル』がそれを葬り去ったのだ。そして『アナル』の精神にはベールの歴史的総合とデュルケーム学派の影響が深く刻印されている。〔さらに著者は、歴史学において『アナル』の行き過ぎに対する反省が起こっており、「出来事」と「制度」の間を揺れ動いた20世紀初頭の論争が現代性を持っていることを指摘して本書を結んでいる。〕このように影響関係は、社会学から歴史学へという方向においてもっぱらとらえられている。しかし、歴史学に与えたインパクトは、デュルケミアンやフランス社会学のその後の発展に、何らかの反作用を投げ返しているのではないだろうか。例えば、アナル派はデュルケミアンを尊重しつつも、その社会学「帝国」主義にたいして絶えず警戒感を抱いていたという。また、デュルケミアンの研究主題も、歴史というよりは民族誌的資料において起源の問題を探究する方向へと比重を移していった。もしかりに、社会学の「歴史からの撤退」が論争の皮肉な帰結であるとすれば、その含意は次のようなものであると評者は考えている。

フェーブルとブロックの『アナル』は、デュルケミアンの『社会学年報』における社会学主義の外交戦略の失敗を反面教師としながら、その理論的定式を模倣して成功した。

後世の歴史家(Burguière)がそのような総括をするように、デュルケム学派の研究の半身はアナール派への受け継がれていったといえよう。その一方で、デュルケムの理論構成における、古典的機能主義との「近くて遠い」関係〔機能＝結果による説明における接近と、歴史＝発生的方法による説明における乖離(Chazel)〕は、社会システム論の発展とともに、機能主義的解釈の方向へと純化されてゆく。この両派に対しそれぞれ独自の理論的貢献をなしてきたという学説史的な経緯は、デュルケムの輝かしい功績というよりも、彼の社会学が二つに引き裂かれてゆく過程であった。そのような見方は悲観的すぎるだろうか。

〔海外通信 - ボルドー第2大学〕 池田祥英（早稲田大学）

早稲田大学大学院の池田祥英です。ロータリー財団から奨学金を受けられることになり、現在ボルドー第2大学のDEA課程に留学しております。DEA課程はパカロリア取得後5年目にあたり、ちょうど日本の修士課程のような雰囲気だと考えていただければよいかと思います。ボルドー第2大学は、基本的に理系の大学で医学部、薬学部、歯学部などを有しているのですが、心理学、社会学、人類学、教育学などの人間科学系の学部、そしてボルドーならではの醸造学部もあり、すべて別々のキャンパスに分かれております。人間科学



ボルドー第2大学

系はヴィクトワールというボルドーの中心に近いところにキャンパスがあるのですが、どちらかというと下町のようなところでありきれいなところではありません。

私の指導教授はキュアン教授(Charles-Henry CUIIN)で、デュルケム研究においても数々の業績があります。デュルケムの『社会学的方法の規準』出版100周年記念シンポジウムがボルドー第2大学で開催されたときに開催校のコーディネーターを務め、そのときの報告の一部をまとめた編著 *Durkheim d'un siècle à l'autre*, PUF, 1997 を出しておられます。DEA課程の授業では「社会移動」についての講義を担当しておられ、その分野においては、著書 *Les sociologues et la mobilité sociale*, PUF, 1993 をはじめとして多数の業績があります。ボルドーと言えば、やはりデュルケムがはじめて社会学を講義したところですので、何かデュルケムにゆかりのものが残されているかキュアン教授にお聞きしたところ、「彼の彫像がある」ということでした。ただし、それは彼の同僚の部屋にあるとのことだったので、私はまだ見ておりません。他にデュルケムと関係があるものとしては、Amphi Durkheim(デュルケム講堂)という大教室があります。スライド装置を備えた最新式の大教室です。

社会学DEA課程の学生数は必修授業に参加している学生を見る限りおよそ30名で、女子学生が過半数を占めています。修士の学生はそれよりはるかに多く、DEAとの合併授業が行われているデュルケム講堂での授業では100名くらいはいるのではないかと思います。こちらの学生もやはり、私のような学説研究よりはむしろ移民問題といった現代のフランスで大きな社会問題となっているテーマを扱う者が多いようです。

今後順調にいけば2002年8月には帰国し、日本で研究活動を再開することになると思います。その折にはよろしくお願ひいたします。

会員業績

- 池田祥英, 2001, 「タルド犯罪学研究序説: ロンブローゾの『生来性犯罪者』批判を中心として」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』46(1)〔第46輯, 第1分冊〕: 67-76.
- 江頭大蔵, 2002, 「家族形成アノミーの発生とその因果モデル 未婚率と有配偶出生率の地域別データによる検証」『広島法学』25(3): 75-108.
- 大野道邦, 2001, 「文化社会学をめぐる問題」『人間文化研究科年報』奈良女子大学大学院人間文化研究科, 16: 133-143.
- 岡崎宏樹, 1995, 「交流の共同体と合一の共同体 バタイユとジラルールの供犠論の比較から」『ソシオロジ』39(3): 3-21.
- , 1996, 「外的な力と内的な力 デュルケームの集合力概念の検討を通して」『京都社会学年報』4: 1-20.
- , 1997, 「集合的理想とコミュニケーション空間 デュルケームの人格崇拜の議論から」『京都社会学年報』5: 1-22.
- , 1998, 「沸騰する社会と宗教」作田啓一・木田元・亀山佳明編『人間学命題集』新曜社, 329-344.
- , 2000, 「聖なるものの社会学 デュルケーム理論の再検討」京都大学文学部(学位論文).
- , 2001, 「善と価値 デュルケーム宗教社会学における道徳概念の再検討」『京都学園大学人間文化研究』5: 77-99.
- , 2001, 「集合意識と非-知 デュルケームとバタイユにおける非個人性の次元」『京都学園大学人間文化研究』6: 1-39.
- Kitagaki, Toru, 1997, Alfred Fouillée et l'idéal républicain, *Zinbun: Annals of the Institute for Research in Humanities*, 31: 83-133.
- , 1999, De l'idée-morale à l'idée-force: la philosophie idéaliste de la Troisième République, *Zinbun: Annals of the Institute for Research in Humanities*, 34(1): 1-24.
- 北垣 徹, 1998, 「道徳の共和国 ジュール・バルトと新カント派の政治思想」『人文学報』81: 95-118.
- , 2001, 「万国博覧会と国際会議 サン=シモン主義による知の組織化」『人文学報』84: 23-57.
- 田中拓道, 1997, 「西洋政治思想史における E.デュルケム 「社会」概念による「政治」観の再構成の試み」『北大法学論集』49(2): 207-257; 49(3): 171-221.
- Tanaka, Takuji, 2001-2002, La question sociale et la politique: une origine philosophique de l'État social dans les années 1830 en France, *The Hokkaido Law Review*, 52(4): 327-382; 52(6)〔掲載ページ未定〕
- 中島道男, 2001, 『Eメール・デュルケム 社会の道徳的再建と社会学』東信堂.
- 松永寛明, 2000, 「刑罰観衆の二形態」『市大社会学』1: 12-23.
- , 2000, 「公開刑廃止の社会的要因」『犯罪社会学研究』25: 86-102.
- , 2001, 「刑罰公衆の集合意識: 『連続射殺事件』報道を題材に」『法社会学』54: 204-19.
- , 2001, 「刑罰制度の構造: 経験的研究のための予備的考察」『市大社会学』2: 23-33.

§ 編集事務局より §

ニューズレター第2号をおとどけします。本研究会も2年目を迎え、第2回・第3回と例会を積み重ねることができました。第2回例会は、飯田会員のご尽力により富山大学経済学部にて、第3回例会は藤吉会員のご尽力により高野山・無量光院の宿坊での開催となりました。高野山での研究会は、参加者がほぼ全員宿坊に宿泊し、研究会・懇親会終了後の激論は深夜(人によっては未明)にまでおよんだ模様です。本研究会の発足によるデュルケミアン研究の人的交流は始まったばかりですが、これをさらに次のステップへとつなげてゆきたいと考えております。今後とも会員の皆様のご協力を切にお願い申し上げます。

次回の第4回研究例会は、2002年4月20日(土)午後12時30分~5時の日程で、神戸大学にて開催の予定です。テーマは「デュルケームの法・国家・政治論」(仮題)で、松永寛明会員(大阪市立大学)と田中拓道会員(北海道大学)からの報告が予定されております。どうかふるってご参加くださいますようお願い申し上げます。